

世界平和と東洋哲学研究所の使命

川田 洋一

『スッタニパータ』の「武器を執ること」の章に、次のような詩句が、釈尊の言葉として伝えられている。

「殺そうと争闘する人々を見よ。武器を執って打とうとしたことから恐怖が生じたのである。わたし(1)がぞつとしてそれを厭い離れたその衝撃を宣べよう(1)」

「水の少ないところにいる魚のように、人々が慄えているのを見て、また人々が相互に抗争しているのを見て、わたくしに恐怖が起つた(2)」

このような釈尊の述懐は、人類そのものが生存の危機に直面している21世紀初頭の今日においては、釈尊

の時代よりも一段と真実味をおびて迫っている。

「水の少ないところ」とは、まさに、「有限なる地球」の切実な自覚である。地球の資源も、エネルギーも、自然生態系も、今日では、人類の果てしない食欲とエゴイズムによって、枯渇し、汚染され、人類の生存の基盤そのものが崩壊に瀕している。地球温暖化、砂漠の拡大と森林の減少、海洋の汚染、食糧の不足、生物種の激減などの「地球的問題群」の噴出である。

それにもかかわらず、釈尊の時代と同じく、それ以上、拡大する貧富の格差、国家、民族、部族間の憎悪や、宗教、文化間の偏見をともなつて、戦争、紛争、

テロが激発し、世界的規模で、人々が「殺そうと争闘」し、「相互に抗争」している。今日では、「武器」も、核兵器、生物化学兵器に象徴される大量破壊兵器へと巨大化し、その殺傷能力は、全人類の滅亡をも引き起こしかねない「恐怖」と化している。

21世紀の開幕に先立って、すでに池田SGI（創価学会インタナショナル）会長は、1961年の2月4日、仏教ヒューマニズムの原点である釈尊成道の地、ブツダガヤに立たれたのである。牧口常三郎創価学会初代会長は、仏教の「平和主義」を貫いて殉教され、その後を受けた戸田城聖第二代会長は、日本全土に、仏教の平和の心を広められた。

池田SGI会長は、二人の恩師の誓願を引き継がれて、全世界へと仏教の「人間主義」にもとづく平和創造の旅に立たれたのである。そして、初訪印の折り、釈尊成道の地ブツダガヤを訪れ、当研究所の設立を構想されたのである。設立の意義と構想については、『新・人間革命』に詳細に語られている。

「アジアには上座部の仏教もあれば、ヒンズー教

やイスラム教もある。また、そうした宗教を土壌として、さまざまな民族の文化、伝統が形成されている。牧口先生は、『認識しないで評価してはいけない』と言われているが、現在の日本では、それらの宗教や文化に対して、ほとんど正しい認識がなされていない。そこで、まず、アジアの宗教、文化、民族性について研究し、正しく認識していくことが、アジアを理解していくうえでも大切なことではないかと思う。さらに、日蓮大聖人の仏法を弘めるうえからも、法華経を中心に研究を重ね、仏法の人間主義、平和主義を世界に展開していくる人材を育む必要がある。それらをふまえて、東洋の哲学、文化、民族の研究機関を設立していきたいと思う⁽³⁾。

論点を整理すると、

- ① アジアの宗教・文化・伝統（民族性）の認識
 - ② 法華経を中心とした研究
 - ③ 仏教の人間主義、平和主義を世界に展開
- ここにいう、アジアの宗教・文化・伝統とは、南伝、

北伝仏教、チベット仏教のみならず、中国の儒教、道教、日本の神道、並びにインドのヒンズー教、さらにイスラーム教、キリスト教等をさしている。

「法華経」を中心とした研究においては、文献学的、学術的研究を基礎にして、その内容の分析と展開を含んでいる。展開まで含むということは、その研究が③の「仏教ヒューマニズム」と平和創出の運動に連動していくからである。

ゆえに、③の意味するところは、「法華経」を中核とした仏教を基盤とし、土壌とする仏教ヒューマニズムによる平和理論を構築・創造し、展開していく方向性である。そして、この構想のなかには、現在、世界的に展開されている池田SGI会長の壮大な文明間対話、宗教間対話が含まれている。

したがって、仏教を源泉として展開してゆく分野は、平和、人権、女性、地球環境、経済、社会、現代科学から、教育、倫理にまで及ぶことが要請されている。要約していえば、「人類的課題」への対応であり、その超克のための理論の創出であり、「文明間対話」、「宗教

間対話」への理論的基盤の構築である。

『新・人間革命』に明記された創立者の設立の期待を、現実のものとするべく、当研究所は、構想の発表からこれまで50年の歴史を刻んできた。

現在までの歴史のなかから、当研究所の①世界の各研究機関との学術交流協定締結、②国際シンポジウムの開催並びに研究員派遣、③インド・日本の学術者交流、④「法華経写本シリーズ」と「法華経展」開催、⑤出版活動にわけて報告したい。

①学術交流協定

(1) インド文化国際アカデミー(所在地・インド・ニューデリー、理事長 ロケツシユ・チャンドラ)。1992年2月。

(2) アジア協会(所在地・インド・コルカタ、当時、事務局長 チャンダン・ロイチャードリ)。1996年8月。

(3) 国立ガンジー博物館(所在地・インド・ニューデリー、当時、理事 アナンド)。2003年8月。

その他、中国、ロシア、カナダなどの学術機関との交流協定をなしている。

② 国際シンポジウムの開催

(1) 東洋哲学研究所構想30周年記念 ICCR (インド文化関係評議会)、SGI (インド青年文化訪問団)との日印合同シンポジウム。「21世紀における東洋思想」。1991年8月。

(2) ICCR (インド文化関係評議会) との日印合同シンポジウム。「環境問題と東洋思想」。1992年8月。(ニューデリー、インド国際センター)。

(3) 国立ガンジー博物館との日印合同シンポジウム。「ガンジー主義と仏教の現代からの視点」。2003年8月。

(4) ラマチャンドラン生誕100周年記念国家委員会との日印合同シンポジウム。「非暴力と平和の世紀をめざして——ガンジー主義とSGIの理念」。2005年9月。(東京戸田記念国際会館)。

(5) サッチャグラハ100周年記念日印合同シンポ

ジウム。ガンジー研究インド委員会。「サッチャグラハと原水爆禁止宣言」。2007年4月(東洋哲学研究所)。

(6) 世界詩歌協会、創価池田女子大学、インド創価学会。「世界平和と調和と人間主義のための詩」。2007年10月。(インド、チェンナイのチンマイセンター)。

③ インド・日本の学術者の交流

次のような知性との対話・親交を深めている。

カラン・シン (ネルー大学前総長)

ロケツシュ・チャンドラ (インド文化国際アカデ

ミー理事長)

故B・N・バンデイ (ガンジー記念館副議長)

N・ラダクリシュナン (ガンジー研究インド評議

会)

ラビンドラ・クマール (ネルー記念館館長)

M・S・スワミナサン (元バグウォッシュ会議会長)

ジャステイス・S・モハン (インド最高裁元判

事)

A・パドマナーバン(世界詩歌協会会長)

サルバキヤ・カティヤール(チャトラパティ・

シヤフジ・マハラジ大学元副総長)

④「法華経写本シリーズ」と「法華経展」開催

1997年の「法華経写本シリーズ」の開始より、すでに13冊の法華経写本を出版。それとともに、1998年11月には、日本で「法華経展」を開催。これには、ロケツシユ・チャンドラ博士も出席。

その後、「法華経展」は海外各国を巡回し、インドでも、デリー、チェンナイ、ムンバイ等の主要都市、学術機関で開催している。

さらに特筆すべきことには、2008年3月、東京戸田記念国際会館にて、「人類の遺産・仏教経典——池田SGI会長とロケツシユ・チャンドラ博士との交流」展が開催。ラグヴェイラ博士、マハトマ・ガンジーとの交流史とともに、「法華経」をはじめとする数多くの経典を展示。

⑤ 出版活動

・1987年7月より、英語版『東洋学術研究』

(*The Journal of Oriental Studies*) 発刊。

・1988年6月、『内なる世界——インドと日本』

(池田大作／カラン・シン対談)

・1990年12月、『仏教——調和と平和を求めて』

(ヨハン・ガルトウング著)

・2005年5月、『インドの精神——仏教とヒン

ズー教』(池田大作／ベッド・ナンダ対談)

その他、『東洋の哲学を語る』(池田大作／ロケツシユ・チャンドラ)、『緑の革命』と『心の革命』(池田大作／モンコンプ・スワミナサン)、『人道の世紀へ』(池田大作／ニールカントラ・ラダクリシュナン)等の対談集の出版に協力している。

さて、東洋哲学研究所は、本年、池田SGI会長の構想50周年を迎えるにあたり、2010年11月18日に、公益財団法人として新出発をしたのである。

新体制のもとでの研究内容は、次の通りである。

第1に「法華經」研究

日蓮は羅什訳「妙法蓮華經」に内包された法理を三つの中心思想として説いている。

第一に「万人の成仏」、第二に「永遠なる仏」、第三に「菩薩道の実践」である。第一の「万人の成仏」の思想は、迹門方便品第二に、この現象世界に仏が出現する目的が「一大事因縁⁽⁴⁾」として説かれている。「諸法実相」の法理に明らかかなように、すべての人々の生命内奥には、「仏性」(仏界)がそなわっている。この「仏性」(仏知見)を「開示悟入」することが、仏のこの世の中への出現の目的なのである。この文から、仏教では、すべての人々は生命の内奥に「仏性」をそなえており、しかも顕現することが可能であることから、「生命の尊厳性」を主張するのである。その一つの例証として、二乗作仏や女人成仏が説かれてくる。

つまり、人種、性別、職業、文化、民族、生まれ、

身心の状態等の差異にもかかわらず、すべての人々は「仏性」を有し、平等に「尊厳」なのである。

このような「万人成仏」の思想は、すべての人々が差別、偏見を乗り越えて「平等」に敬いあつて「共生」する社会を指し示している。ここに「人間共生」の姿がある。さらに、仏教では、人間のみならず、生きとし生けるものの「生命の尊厳」性を説いている。薬草喩品には、万物「共生」のイメージが、三草二木の譬えとして説かれている。

第二に「永遠なる仏」の思想である。この思想は、人類共生の社会の宇宙論的基盤を形成している。

本門寿命品第十六では、「釈尊」に即して、その本地に「久遠仏⁽⁶⁾」を明かすのであるが、寿命品におけるこの文は、釈尊が成仏したのは永遠の過去であり、そして未来についても成仏してから現在までの二倍であると、実質的には未来の寿命も永遠であることを示している。「永遠なる仏」とは、釈尊が覚知した宇宙根源の法と一体である。それ故に、「永遠なる釈尊」は「永遠の救済仏」なので

ある。寿量品には、「或説己身或説他身⁽⁷⁾」等と示されている。戸田会長は、「慈悲論」のなかで、「この宇宙はみな仏の実体であって、宇宙の万象ごとく慈悲の行業である⁽⁸⁾」と述べ、「宇宙仏」の衆生救済の慈悲の働きを説かれている。「宇宙仏」の慈悲の働きに支えられて、人類共生の社会の創出が可能となるのである。

第三の「菩薩道の実践」とは、まさに、「宇宙仏」の働きを助け、増幅し、それを自らの使命として生きる人々——即ち菩薩群の活動を意味するのである。「法華経」には、実にさまざまな菩薩群が説かれているが、まず従地涌出品第十五に出現する地涌の菩薩は、釈尊滅後の「法華経」の担い手として、「如来の使い」(法師品)⁽⁹⁾として活躍するのである。また葉王菩薩は、医療の分野を担い、妙音菩薩は「音楽」に象徴される芸術の創造の働きであり、普賢菩薩と文殊菩薩は学術、科学、思想への貢献をさしている。

そして、民衆の「現世利益的」な要望に耳を傾け、

その願いに応じつつ、何ものにも怖れない境涯を与えゆく菩薩——無畏者——が観世音菩薩である。

さらに、不軽品第二十には、すべての人々を敬い、あくまでも対話、非暴力によって「仏性」と善心を開発しゆく菩薩として、不軽菩薩が登場してくる。悪口罵詈したり、杖木や瓦石で打とうとする人々に対しても、「我れは深く汝等を敬う⁽¹⁰⁾」という二十四文字の「法華経」を唱え、すべての人々を未来の仏として「平等に尊敬」する菩薩行をくり返すのである。

羅什訳「妙法蓮華経」に説かれる、以上のような三大思想を、人類の恒久平和と幸福のために、現代社会において具現化しようとしている仏教団体が、創価学会・SGIである。つまり、21世紀の今日における菩薩道の展開である。

このような三大思想を中心に、その哲学・思想的な研究、文献学的研究、歴史的研究を行なうのが、この第1部門である。このなかで、インドにおける「法華経」の編纂から、竜樹、世親をへて、中

国の天台、日本の伝教、そして日蓮仏教へ引き継がれる「法華経」の歴史的研究が行われる。さらに、現代社会における日蓮仏教の意義について研究している。また、「法華経」写本シリーズの発刊も、この部門である。

第2に「人類的課題と宗教」――

宗教間対話に向けて」研究

仏教、「法華経」の中心思想を、人類的課題の克服にいかに関与していかかを研究する部門である。

そのために、仏教と平和、環境、女性、人権、生命倫理等の関わりに焦点を当てている。さらに、仏教と他の思想、哲学、宗教との対話を推進していく。ヒンズー教、ガンジー主義、イスラーム、キリスト教、儒教、道教、神道との対話、並びに、上座部仏教と大乘仏教の対話も押し進めている。このような対話を通して、人類の生存、共生、平和に貢献するのである。

第3に、「仏教の現代的展開」の研究

仏教の現代的展開として、教育論、人間論、生命論、平和論、文明論、歴史論等を研究する。

仏教、「法華経」、日蓮仏教へと伝わる、仏教ヒューマニズムを基盤として、教育学、東西の思想・哲学、現代の生物学、医学、生命科学等とも対比しながら、仏教の「人間主義」、「平和主義」などを学術的観点から考察していく。

以上、3部門の研究内容が、新体制の内実であり、仏教ヒューマニズムをきっかけに、地球的問題群を引き起こし、人類の生存さえ危惧される現代物質文明の転換のための運動を開始している。主要なものを列挙しておきたい。

第一に、「法華経」写本シリーズの発刊である。昨年2010年12月、ブラジルで、ブラジル哲学アカデミーとの共催で「法華経展」を行っている。そして、今回、インド国立公文書館と交流協定を結び、ギルギット版「法華経」を出版していく予定である。

第二に、池田思想を集大成するためのシリーズ、『世界が見た池田大作』、『世界市民 池田大作』、『池田大作——世界との対話』3巻の完結である。

第一の『世界が見た池田大作』は、300を越える大学名誉学術称号の集大成であり、各大学からの推薦の辞が編纂されている。

第二の『世界市民 池田大作』は、池田SGI会長の世界市民としての活躍を集大成した書である。平和、環境、人権、女性、文明、文化等の項目別に、世界市民としての条件が列挙されている。

そして、第三の『池田大作——世界との対話』では、世界の知性との対話のエッセンスが集約されている。

これらの3冊に含まれるインド関係の代表的な知性をあげると、次のとおりである。

・ デリー大学名誉文学博士号授賞 V・R・メー
ター元副総長

・ インド文化国際アカデミー「最高名誉会員証」
ロケツシユ・チャンドラ理事長

・ プルバンチャル大学名誉文学博士 プレム・チ

ヤンド・パタンジャリ元副総長

・ ラビンドラ・バラティイ大学名誉文学博士
バラ
ティ・ムカジー元副総長

・ アジア協会「タゴール平和賞」アマレンドウ・
デー元事務総長

・ インド科学者会議連盟「名誉顧問」サルバキ
ヤ・カティヤール元会長

・ 世界詩歌協会「世界民衆詩人」故クリシュナ・
スリニバス会長 A・パドマナーバン会長

さらに、対談としては、ロケツチユ・チャンドラ対談、ラダクリシュナン対談、スワミナサン対談、ベツド・ナンダ対談の内容が含まれている。

第三には、国際シンポジウムの開催である。2010年12月には、ブラジル哲学アカデミーとの共催でシンポジウム「現代文明と哲学」を行っている。また、今回の訪印に当たり、インディラ・ガンジー国立芸術センター主催で、「鳩摩羅什——哲人そして予言者」のシンポジウムに、東洋哲学研究所も研究員を派遣し、日本から見た鳩摩羅什についてレポートしている。

そして、今日、ロケッシユ・チャンドラ博士をはじめ、インドの関係者のご尽力により、池田SGI会長による東洋哲学研究所設立構想50周年を記念してのシンポジウム、「The New Humanism for World Peace」を開催している。

これから、多くのインドの方々から貴重なスピーチがあるものと期待している。これらのスピーチを、私も東洋哲学研究所の新たな飛翔発展への精神的、思想的な「糧」として、次の20年（創価学会創立100周年）に向けて、この東洋哲学研究所の原点であるインドから出発していく決意である。

注

- (1) 『スッタニパータ』 935、中村元訳『ブツダのことば スッタニパータ』、岩波文庫、2003頁。
- (2) 『スッタニパータ』 936、同書、2003頁。
- (3) 池田大作『新・人間革命』第3巻、聖教新聞社、315～316頁。
- (4) 『妙法蓮華経並開結』創価学会、120～121頁。
- (5) 同書、241～242頁。
- (6) 同書、477～478頁。

(7) 同書、481頁。

(8) 『戸田城聖全集』第3巻、聖教新聞社、44頁。

(9) 『妙法蓮華経並開結』、357頁。

(10) 同書、557頁。

(かわだ よういち／東洋哲学研究所所長)